現代日本のコートハウスにおける中庭の設えと居間との連繋

FURNISHING OF COURTYARDS AND CONNECTION WITH LIVING ROOMS IN CONTEMPORARY JAPANESE COURTYARD HOUSES

村田 涼*, 根ヶ山 愛子**, 安田 幸一***
Ryo MURATA, Aiko NEGAYAMA and Koichi YASUDA

The aim of this study is to clarify the characteristics of indoor and outdoor living spaces in contemporary Japanese courtyard houses. Firstly, furnishings of courtyards, such as floor-materials, sky-coverings and fixtures, are analyzed. Secondly, spatial connections between courtyards and living rooms are analyzed by their sectional arrangements and floor areas. Finally, seven compositional types of furnishing of courtyards and connection with living rooms are suggested. Prevalent types show a tendency of characteristics of small courtyards something like attached outdoor rooms because these courtyards are mainly furnished with artificial floor-materials and connected to adjacent living rooms. Types of the combination of artificial and natural floor-materials emerged in various spatial connections. The type of courtyard furnished with only natural floor-materials is found in the case of combination with living rooms on the upper floor.

Keywords : *Courtyard House, Courtyard, Living Room, Furnishing, Connection*

コートハウス, 中庭, 居間, 設え, 連繋

1. 序論

1.1. 研究の背景と目的

コートハウス^{注1)}は、建物や塀で囲まれた外部空間である中庭^{注2)}を有する、都市住宅の形式の一つである^{注3)}。日本では、京都などの町家にみられる形式としても知られているが、このような伝統的な建物に限らず、現代の建築家による様々な住宅作品においても、コートハウスの形式を用いた例は多くみられる。特に、近年の狭小化・密集化が進む都市部の住宅では、居住部を複数の階に積層する傾向に加え、中庭を設け屋外を建物の中に取り込む構成は、周辺からの視線の調節や通風・採光の確保という目的や、屋外をアウトドアリビングのように活用する手法としても有効と考えられている^{注4)}。

筆者らはこれまで、現代日本におけるコートハウスを対象に、建物内外に生活空間^{注5)}を設ける都市住宅の計画手法としての特徴を体系的に検討してきた^{注6)}。つまり既報においては、特に中庭を主とした外部空間の多様なあり方に着目し、屋外の生活空間の配置および周辺環境への視覚的な開放性や、建物内外の生活空間の前面道路に対する視覚的な開放性と閉鎖性にみられる特徴を明らかにした。これ

らに対し本研究は、屋外の生活空間としての中庭の特徴を、床仕上げの種類、庇や樹木などの要素の組合せから捉え、さらに居間との隣接関係や面積の大小関係を検討することで、コートハウスにおける建物内外の生活空間の構成的な特徴を検討するものである。

これまでの日本におけるコートハウスの展開には、特に1960年代にみられるような、集合化を前提とした敷地一杯に閉鎖的に塀や壁を立てるあり方が、コートハウスという言葉の印象を強く決定づけることになったと考えられている^{注7)}。しかし、過密する都市環境において敷地全体を住居として構想し、生活空間を建物内外の関係から計画するコートハウスの志向^{注8)}は、このような通説としての固定的な印象を超えて、壁で囲まれた外部空間をつくるという形式を共有しながらも、様々な方法が実践されているのではないだろうか。

例えば、ウッドデッキが敷かれた中庭に居間が大きな窓で面し、内外がひとつながりになる、あるいは同じ規模で同じ仕上げの中庭と居間が隣り合うことで、中庭が屋根のない外部の部屋のようにつくられるなど、建物内外の生活空間の構成上の差異から生じる様々な特徴がみられる。これらの性格を、中庭の要素からみた屋外での

本論文は2011年度日本建築学会大会学術講演会(関東)で発表したものを修正してまとめたものである。

* 東京工業大学大学院理工学研究科建築学専攻 助教・工修

** 東京工業大学大学院理工学研究科建築学専攻 大学院生

*** 東京工業大学大学院理工学研究科建築学専攻
教授・博士(学術)

Assistant Prof., Dept. of Architecture, Tokyo Institute of Technology, M. Eng.

Graduate Student, Dept. of Architecture, Tokyo Institute of Technology

Prof., Dept. of Architecture, Tokyo Institute of Technology, Ph. D.

居場所の設け方と、居間と中庭の関係からみた建物内外の居場所の連繋という、異なる水準の構成の重ね合わせから捉えることで、中庭を主とした建物内外の生活空間の多様なあり方を体系的に位置づけることができると考える。そこで本研究では、現代日本のコートハウス^{注9)}を対象に(付表1)、中庭^{注10)}を構成する要素の組合せや配置(以下、設え^{注11)})と、中庭と居間^{注12)}における建物内外の生活空間の連繋を検討することで、コートハウスにおける内外の生活空間の構成的特徴の一端を明らかにすることを目的とする^{注13)}。

1.2 既往の研究

これまでになされてきた住宅の空間構成に関する学術的な研究のうち、本研究のように、複数の異なる建築家による中庭をもつ現代住宅作品の構成を分析したものは、著者らによるもの^{注14)}の他には、計画的データの多角的な数値化により計画手法を分析したもの^{注15)}、中庭の形態や使われ方を分析したもの^{注16)}、中庭と周辺環境との対応関係を検討したもの^{注17)}、中庭の規模や平面、設計意図を分析したもの^{注18)}などがある。また、特定の建築家によるコートハウスを対象としたものには、ミース・ファン・デル・ローエの作品の平面を幾何学的関係から分析したもの^{注19)}、西澤文隆の作品の室と庭の関係を操作する建築的手法を分析したもの^{注20)}などが挙げられる。これらはコートハウスの空間構成にみられる特徴を理解する上で、いずれも有用な知見を与えている。

また、戸建て住宅作品の外部空間と内部空間の構成的な関係を扱ったものには、現代日本の住宅作品を対象に「建築化された外部」の分節と統合を分析したもの^{注21)}、外部空間と内部空間の配列と接続を分析したもの^{注22)}、ヴォリュームの組合せによる外形構成と室の大きさや動線による内部の構成の対応関係を分析したもの^{注23)}、領域を限定された外部空間の構成形式を用途や形態、内部空間との配置から分析したもの^{注24)}、国内外の伝統住宅や現代住宅を対象に形態と性質という2つの側面から内外境域について論じたもの^{注25)}、近代住宅作品の平面計画を壁長と室面積から分析したもの^{注26)}、南カリフォルニ

アの近代住宅を対象に建物内外の居住空間の関係性から住宅の開放性を分析したもの^{注27)}がある。また、建築の外部空間に関する研究では、配置による外部と建築化された外部という2水準から建築の外部空間を捉え、建物へのアプローチ動線との関係から検討したもの^{注28)}が挙げられる。これらは建築の外部空間と内部空間の構成に関わる特徴を把握する上で、いずれも重要な視座を提供している。

これらの既往研究に対し、本研究のように現代日本における住宅作品の中から、中庭を有するコートハウスという形式の共通性により対象を収集し、屋外の生活空間としての性格を中庭の設えにより捉え、さらに居間との連繋による計画的な特徴を検討することで、建物内外にわたる生活空間の構成を体系的に比較した既往研究はみられない。従って、本研究の成果は、コートハウスの形式を用いた都市住宅の計画手法に関して、有用な知見を与えるものと考ええる。

1.3 研究の方法と概要

序論に続き2章では、中庭における屋外の居場所の設け方に着目する。そこで、中庭の床仕上げ、庇、樹木などの要素について検討し、これらの配置や組合せから中庭の設えパターンに分類する。3章では、建物内外の居場所の連繋に着目し、居間と中庭の隣接関係や面積を検討する。4章では、前章までに得られた中庭の設えパターンと、中庭と居間の隣接関係および面積を重ね合わせて捉えることで、現代日本のコートハウスにおける中庭の設えと居間との連繋にみられる構成類型を導き、その特徴を明らかにする。さらに、これらの類型の年代的分布についても考察する。

2. 中庭の設え

2.1 中庭の床要素と配置

中庭の生活空間としての特徴は、例えばウッドデッキ敷きの中庭は歩行や滞在に適し、土のままの未舗装は植栽に適するなどのように、床仕上げの差異から居場所の設け方の特徴を捉えることができると考える^{注29)}。そこで、中庭の床仕上げをコンクリートなどの「歩

no.106 上荻の家		4章 中庭の設えと居間との連繋
類型①

	視覚的 連続あり		
	樹木 造付家具 ウッドデッキ		
2章 中庭の設え		3章 中庭と居間の隣接関係と面積	
床要素	ウッドデッキ	隣接関係	面積
覆い要素	なし	視覚的連続あり・同階	$C < L$ ($C/L=0.53$)
立体要素	樹木、造付家具
中庭の設え パターン	A-ii
	歩行材		

図1 分析例

表2 中庭の床要素の配置

歩行材全面	歩行材+非歩行材 (68)									非歩行材全面
	歩行材による包囲 (35)				歩行材による包囲なし (33)					
					非歩行材による包囲 (7)			包囲関係なし (26)		
	四辺包囲	三辺包囲	二辺包囲	四辺被包囲	三辺被包囲	二辺被包囲	複数隣接	一辺隣接

(75)	(15)	(6)	(14)	(0)	(1)	(6)	(3)	(23)	(21)	

表1~4注)表中の()内の数字は該当する作品数を示す。

行材」、土などの「非歩行材」に分け、これらを「床要素」として抽出した^{注30)}(表1)。「歩行材」では「タイル」(60/164)^{注31)}、「ウッドデッキ」(56/164)が多く、「非歩行材」では芝生や草花で緑化された「芝」(66/164)が最も多くみられた。次に、これら「床要素」の配置を検討した(表2)。中庭の床全面が「歩行材」で仕上げられた「歩行材全面」(75/164)、「非歩行材」と組み合わせた「歩行材+非歩行材」(68/164)がほぼ同数で大半を占めることから、「歩行材」を用いる中庭が主であることが分かる。さらに、「歩行材+非歩行材」について包囲関係に着目したところ、包囲関係がない「一辺隣接」が最も多く(23/68)、次いで「歩行材による包囲」の「四辺包囲」(15/68)、「二辺包囲」(14/68)が多くみられ、「非歩行材による包囲」は少ない。

2.2 中庭の覆い要素

次に、中庭の上部を部分的に覆い、半屋外の居場所をつくるものとして「覆い要素」を検討した(表3)。格子や棒状の覆いが架かる「パーゴラ」、軒や庇が張り出す「庇」、上階にテラスやバルコニー等が張り出す「上部テラス」に分けて抽出したところ^{注32)}、「庇」(41/164)が最も多くみられた。また、「パーゴラ」が少ないことから、「覆い要素」

は面状のものが主であることがわかる。

2.3 中庭の立体要素

さらに、屋外の居場所としての行為に関わる、中庭に備え付けられた要素として、中高木を植えて木陰をつくる「樹木」、ベンチなどを造り付ける「造付家具」、屋外に縦動線を設ける「階段」に着目し、これらを「立体要素」として抽出した(表4)。「樹木」は半数以上の作品でみられ(93/164)、その内、複数の樹木でまとまりのある緑地帯とする「複数」(35/93)よりも、シンボルツリーのように1本の木を植える「単数」(58/93)が多い。これに対して、「造付家具」や「階段」は少ないことから、座るなどの滞在の行為や、上り下りの移動を促す「立体要素」は少ない。

2.4 中庭の設えパターン

全作品について、「床要素」「覆い要素」「立体要素」の組合せを検討し、特に居場所の領域を特徴づけるものとして「床要素」を主に捉えることで、中庭の設えパターンとして3つに分類した(表5)。

アは床全面を「歩行材」とすることで中庭の全域が居場所としての性格をもつものであり、このうち「覆い要素」のない、空に抜けた中庭をもつア-ii(50/164)が多くみられた。アとは対照的に、ウは床全面を「非歩行材」とした観賞の庭としての性格をもつものであり、他のパターンに比べて該当する作品数が少ない(21/164)。イは「歩行材」と「非歩行材」を組み合わせ、居場所と観賞という庭として対照的な性格を併せもつもので、このパターンのみに「覆い要素」があるイ-iの方が多くみられた(39/164)。

3. 中庭と居間の隣接関係と面積

3.1 中庭と居間の隣接関係

コートハウスにおける建物内外の生活空間のうち、本研究では中庭と居間を主要な外部と内部の生活空間と考え、両者の関係にみられる構成的な特徴を検討する。特に、敷地や建物の規模が限られた都市部のコートハウスでは、相互の隣接関係や大きさの配分は、内外の生活空間を連繋して計画する際の特徴を顕著に表すと考える。そこで、中庭と居間の隣接関係を大開口^{注33)}による視覚的・動線的な連続と断面的な配置によって整理した(表6)。

「視覚的連続あり」が全体の9割以上(153/164)を占め、このうち断面的な配置では「同階(動線の連続あり)」が最も多くみられた(104/164)。これに対し、相互に階を違えて積層する「別階」は半数以下(49/164)であり、また「同階(動線の連続なし)」には該当する作品はみられなかった。このことから、中庭と居間は同じ階に近接して配置され、大開口によって水平方向に視覚的・動線的なつながりがつくられる傾向があることがわかった。

3.2 中庭と居間の面積

次に、中庭や居間などの面積に着目し、大小関係にみられる特徴を検討する。まず、中庭の面積を整理したところ(表7)、約9割(146/164)が40㎡未満であり、特に20㎡未満の小さな中庭が最も多い(90/164)。また、最小面積が5.36㎡であるのに対して、最大面積は104.53㎡の例もみられ、およそ20倍の差がみられた。なお、平均面積は18.25㎡(約11帖)であった。

続けて、中庭の面積と建築面積との関係を整理した(表8)。両者の面積比(中庭面積/建築面積)は0.15～0.20の組合せが最も多くみられ(40/164)、平均値は0.25であった。中庭の面積が20㎡未

表5 中庭の設えパターン

床要素の配置	no.	作品名	床要素	覆い要素	立体要素	中庭の設えパターン
歩行材全面	9	住吉の長屋	B	u	s	ア-i 覆い要素あり
	11	新町の家	C ₀	e	t	
	13	福田邸	B	e	t	
	33	関大前の家	B	u	t,s	
	44	洛北の家	C ₀	u	f,s	
	127	高松町レージ	C ₀	e	s	
	19	Choi Box	B	u		
	37	達屋造の家	C ₀ D	u		
	50	大山町の住宅	B	e		
	73	T-HOUSE	D	e		
	104	中村中町の家	B	e		
	8	代田の町家	B		f	ア-ii 覆い要素なし
	16	U氏邸	D		t	
	47	HOUSE XX	C ₀		s	
	97	桜台の家	D		t	
	106	上狹の家	D		t,f	
	23	深井中町の家	B			
	39	尾山台の住宅	B			
	46	石丸の家	C ₀			
	63	用賀の家	B			
	84	喜連舎	D			
	117	G&G HOUSE	D			
	132	目白の家	D			
	137	ガ マハス	D			
	156	世田谷S	D			
	4	正面のない住宅/H	B+P+W	e	t*	イ-i 覆い要素あり
	12	対空間の家	C ₀ +V	u	t,s	
	30	大野郡インダ ガラス	B+V	e	t	
	31	戸塚の家	D+V	e	t,s	
	35	山本邸	B+V	u	t*	
	58	玉串川の家	B+S	e	t	
	107	親縁住居	D+V	e	t	
	116	自由が丘のユハウス	B+V	e	t*	
	144	box q	D+V	e	t*	
	6	山城さんの家	B+V	e		
	7	泉の家	B+V+W	e		
	131	仁保の家	C ₀ +W	e		
	15	Pocket park House	B+V		t	イ-ii 覆い要素なし
	17	松原の家	B+V		t	
	29	東玉川の住宅	B+V+W		t,s	
	42	アガハウス-2	C ₀ +V		t*	
	51	幸町の家	B+V		s	
	55	辰川の家	D+V		t*	
	68	台付榎の家	B+P+V		t	
	94	両国のユハウス	D+V		t	
	95	菩提樹の家	D+S		t	
	124	標準住宅2004	D+S		t	
	152	Rainbow House	C ₀ +V			ウ-i 覆い要素あり
	153	G-House	C ₀ +V			
歩行材+非歩行材	1	M氏邸	P+V	e	t*	
	2	正面のない住宅	S	p	t*	
	93	北畠の家	S	u	t,s	
	123	上原の家	P	u	t	
	159	江波東の家	V	u	t	
	18	森若邸	P	u		
	5	越智邸	P		t	ウ-ii 覆い要素なし
	54	山坂の家	P+V		t*	
	57	海老園の家	V		t*	
	74	松原の家	V		t*	
	76	春日川の住宅	P+V		t	
	98	上大岡の家	S		t,s	
	109	M氏邸	V		t	
	146	F邸	P+V		t	
	79	D-FISH	W			
非歩行材全面						他6件

表5注) 表中の()内の数字は該当する作品数を示す。記号は表1～4に準じる。各々の要素の中で複数の種類が抽出されたものは、カンマ(,)を付けて併記する。また、床要素の「歩行材+非歩行材」はプラス(+)を付記して表す。

満の小さな中庭は、中庭面積 / 建築面積が平均値より大きい0.40～0.45の範囲までみられ、狭小な建物であっても小さな中庭が設けられていることがわかる。

さらに、中庭と居間の大小関係を面積比（中庭面積 / 居間面積）により整理し、面積比が0.8未満を「中庭が小」、0.8以上1.2未満を「同等」、1.2以上を「中庭が大」として分類した（表9）。「中庭が小」が過半を占め（107/164）、また面積比の平均値が0.78であることから、居間よりも中庭が小さくつくられる傾向がわかる。さらに、「中庭が小」の中では、居間に対して中庭が半分以下の大きさの面積比0.4～0.5となる組合せが最も多くみられた（25/164）。また、「同等」や「中庭が大」にも20㎡未満の小さな中庭をもつ組合せがみられ、60㎡以上の大きな中庭は「中庭が大」だけでなく、「中庭が小」にもみられた。

4. 中庭の設えと居間との連繋

4.1 中庭の設えと居間との連繋の構成類型

前章までに検討した中庭の設えと、隣接関係や面積からみた中庭と居間の連繋という、異なる水準の構成的な特徴を重ね合わせて捉えることで、コートハウスにおける中庭を主とした建物内外の生活空間の特徴を検討する。そこで、2章の中庭の設えパターンを縦軸に、3章の居間との連繋を横軸にしたマトリックスにより検討し、作品数の多いまとまりから7つの構成類型が得られた（表10）。

①～④は中庭と居間が同階で視覚的・動線的に連続するものである。このうち、①は居間に小さな中庭を組み合わせ、「歩行材」により中庭のすべての領域を居場所として設えることで、居間の付属室のような性格の中庭を設けるものである。該当数が最も多く、また「造付家具」による設えがみられる唯一の類型である。特に、「覆い要素」も「立体要素」もない組合せが多く、小さいながらも遮蔽物のない空に抜けた中庭という設えの傾向がみられた。②～④は「歩行材+非歩行材」の組合せにより、中庭が居場所と観賞という対照的な性格を併せもつものである。このうち、②は小さな中庭が居間と隣り合うことで、中庭は部分的に付属室のような性格をもつが、①とは異なり「覆い要素」や「樹木」によって半屋外空間のように設える傾向がみられた。③は内外の生活空間の面積比が同等なもの、④は中庭の方が大きく、屋外の生活空間の面積配分を高めるものである。このような面積比の類型は、中庭の設えが「歩行材+非歩行材」の場合のみにみられ、また「覆い要素」や「立体要素」をもつものが多い。このことから、面積比が「中庭の方が小さい」という主調からはずれ、内外の大きさが相同あるいは逆転する場合には、「床要素」による居場所と観賞という対照的な性格に、「覆い要素」や「立体要素」が加わり、様々な要素により輻輳的に中庭を設える傾向がみられる。

⑤～⑦は中庭と居間が視覚的に連続するが別階に位置することで、内外が立体的な隣接関係をもつものであり、すべて中庭が居間よりも小さいものである。このうち、⑤は中庭のすべての領域を「歩行材」により居場所として設えるものであり、「覆い要素」のないものが多いことから、居場所としての小さな中庭に空への抜けや内外の立体的な隣接関係を組み合わせることで、高さ方向の関係性を強調する傾向があるといえる。⑥は中庭を「歩行材+非歩行材」とするものであり、「テラス」による「覆い要素」や「階段」が多いことから、中庭まわりに断面的な関係をつくる要素を多くもつ傾向がみられる。⑦は「非

歩行材」により中庭のすべての領域を観賞の庭として設えるもので、このような類型は居間との連繋が別階かつ中庭が小さいもののみであり、「覆い要素」がなく、「樹木」が多いという傾向がみられる。

また、中庭の設えに「非歩行材」を用いた②③④⑥⑦では、「芝」と「樹木」という「床要素」と「立体要素」の両方で緑を取り込む設えが多いのに対し、「歩行材」のみの①⑤では「樹木」は少なく、自然物ではなく人工物による設えを強調する傾向がみられた。

4.2 類型の年代的分布

次に、各類型の作品数にみられる年代的分布^{注34)}を、中庭と居間の隣接関係および中庭の床要素との関係から整理する（表11）。

1960年代、1970年代は中庭と居間が別階の類型はみられず、すべて同階で視覚的・動線の連続をもつ。このうち、中庭が居間よりも

表6 中庭と居間の隣接関係

視覚的連続あり (153)		視覚的連続なし
同階(動線の連続あり)	別階

(104)	(49)	(11)

表7 中庭の面積

表8 中庭の面積と建築面積

表9 中庭と居間の面積

表6注) 「視覚的連続あり・同階」には「動線の連続なし」も考え得るが、対象作品中には見られなかったため、省略した。
表6、9注) 表中の()内の数字は該当する作品数を示す。

大きく、居場所と観賞の設えが共存する④が多い。1980年代以降には、すべての類型に該当する作品がみられる。特に1980年代は類型間の該当数に偏りが少なく、多様な形式が用いられていることがわかる。1990年代は①②が多く、居場所としての設えをもつ小さな中庭を居間と同階で視覚的・動線的に連続して設けることで、居間の付属室としての中庭という傾向がみられるようになる。2000年代も引き続き①②は該当数が多く、特に中庭のすべての領域を居場所として設える①が全類型の中でも最も多くみられる。このことから、現代日本のコートハウスにおける内外の生活空間の構成的な特徴の一つとして、居間の付属室としての小さな中庭という形式が、1990年代以降に顕著な傾向であることがわかる。一方、2000年代には①と同様に小さな中庭のすべての領域を居場所としながら、居間とは別階に

位置する⑤が多くみられるようになる。つまり、2000年代以降も小さな居場所としての中庭という主調は継続しているが、中庭のすべての領域を居場所として設える傾向が強まり、一方で居間との関係は多様化し、居間の付属室としての中庭、居間からの独立性を高めた中庭というように、居間との連繋が分化する傾向がみられる。これらのことから、近年の都市住宅にみられる「アウトドアリビング」と「積層化」という特徴は、現代日本のコートハウスにも顕著であり、特に「積層化」は2000年代以降に増えていることがわかる。

5. 結論

本研究では、現代日本のコートハウスを対象に、中庭を構成する要素からみた居場所の設えと、隣接関係や面積からみた中庭と居間

表10 中庭の設えと居間との連繋

居間との 連繋		視覚的連続あり (153)						視覚的連続なし (11)																				
		同階(動線の連続あり) (104)			別階 (49)																							
中庭の 設え		中庭が小 C<L (61)	同等 C=L (20)	中庭が大 C>L (23)	中庭が小 C<L (38)	同等 C=L (7)	中庭が大 C>L (4)																					
歩行材全面 (75)	アイ (25)	11 C ₀ e t 80 D e s 105 C ₀ e s 113 G p t t 125 D e e t 50 B e e - 78 D p e - 104 B e e - 129 D e e - 142 D u -	9 B u s 32 B u s 120 D e t 73 B e -	13 B e t 40 C ₀ e s	59 B,D e t 102 B u t 127 C ₀ e s 66 B u -	33 B u t s 19 B u -	44 C ₀ u f,s	37 C ₀ D u - C=L 136 B,G u - C<L																				
	アイ (50)	8 B - f 133 B - - 43 B - t 145 C ₀ - - 48 B - s 148 D - - 106 D - t,f 150 D - - 103 B - t,f 151 D - - 135 D - s 156 D - - 155 D - t 164 B - - 23 B - - 56 D - - 63 B - - 71 D - - 72 B,D - - 75 D,G - - 83 D - - 88 B - - 99 G - - 122 G - - 126 C ₀ - - 132 D - - no.106 上萩の家	97 D - t 121 D - t 38 D - -	47 C ₀ - s 85 C ₀ - f 49 B - - 139 B - -	16 D - t 26 B - s 100 C ₀ - s 147 D - t 162 B - t 163 B - s 84 D - - 64 B - - 130 C ₀ - - 137 C ₀ - - 141 D - - 160 D - -	no.84 喜連舎	39 B - -	24 B - f C=L 46 C ₀ - - C=L 112 D - - C<L 117 D - - C<L																				
歩行材＋非歩行材 (68)	イ (39)	12 C ₀ +V u t,s 36 B+S e t 70 D+S e t 82 D+V u t 91 D+V e t 107 D+V e t 134 G+V e t 138 B,D+V e t 144 D+V e t 149 B+V e t 158 C ₀ +S,P u t 6 B+V e - 131 C ₀ +W e -	20 B+V e t 58 B+S e t 90 D+V u t 140 D+V p t 154 B+V e t 157 C ₀ +V e t	4 B+PVW e t 7 B+VW e - 10 B+S,W e t 31 D+V e t,s 52 D+S e t 53 B,D+V e t,s 114 B+V e t 116 B+V e t	45 C ₀ +V u t,s 67 C ₀ +S u t,s 108 D+V u t,s 115 D+V e s 119 C ₀ +V u t	30 B+V e t 35 B+V u t 86 B+V u t 87 B+V u p t	41 D+V e t	65 C ₀ +V e t C<L 128 D+V e t C<L																				
	イ (29)	21 B+P - t 29 B+V,W - t,s 51 B+V - s 60 C ₀ +V - t 62 B+V - t 68 B+V,P - t 77 B+V - t 89 C ₀ +V - t 95 D+S - t no.95 菩提樹の家	15 B+V - t 17 B+V - t 101 C ₀ +V - t,s 42 C ₀ +V - t 94 D+V - t no.42 7 ROKUHOUSE2	34 D+V - t 55 D+V - t 61 C ₀ +V - t 118 B,D+V - t 3 B+PV - - 153 C ₀ +V - - no.116 自由が丘のユトハウス	14 C ₀ +V - t 69 B,D+V - t 81 C ₀ +S - t,s 110 C ₀ +S - t 124 D+S - t 22 B,D+V,W - - 152 C ₀ +V - - no.152 Rainbow House	28 B,D+V,S - t	27 B+V - t C<L																					
非歩行材全面 (21)	ウ (6)	159 V u t 143 V - t 79 W - -	76 P,V - t 92 V - t	1 P,V e t 2 S p t 18 P u -	123 P u t 93 S u t,s			5 P - t C<L 96 S - t,s C<L																				
	ウ (15)	<table><tr><td>凡例</td><td>128 D+V e t C<L</td></tr><tr><td>作品 no.</td><td>床要素</td></tr><tr><td></td><td>覆い要素</td></tr><tr><td></td><td>立体要素</td></tr><tr><td></td><td>面積</td></tr></table>	凡例	128 D+V e t C<L	作品 no.	床要素		覆い要素		立体要素		面積	<table><tr><th>作品番号と年代の対応</th><th>件数</th></tr><tr><td>no. 1～6：1960年代</td><td>6</td></tr><tr><td>7～11：1970年代</td><td>5</td></tr><tr><td>12～46：1980年代</td><td>35</td></tr><tr><td>47～96：1990年代</td><td>50</td></tr><tr><td>97～164：2000年代</td><td>68</td></tr></table>	作品番号と年代の対応	件数	no. 1～6：1960年代	6	7～11：1970年代	5	12～46：1980年代	35	47～96：1990年代	50	97～164：2000年代	68	54 V,P - t 57 V - t 74 V - t 98 S - t,s 109 V - t 111 P - t 146 V,P - t 161 V,P - t,s 25 P - -	no.146 F邸	
凡例	128 D+V e t C<L																											
作品 no.	床要素																											
	覆い要素																											
	立体要素																											
	面積																											
作品番号と年代の対応	件数																											
no. 1～6：1960年代	6																											
7～11：1970年代	5																											
12～46：1980年代	35																											
47～96：1990年代	50																											
97～164：2000年代	68																											

表10注) 表中の○内の数字は該当する作品数を示す。記号は表1~9に準じる。

の連繋を重ね合わせて捉えることで、中庭を主とした建物内外の生活空間にみられる構成的な特徴を検証した。

2章の中庭の設えに関する分析では、中庭に居場所を設ける要素として「床要素」「覆い要素」「立体要素」を挙げ、それぞれの要素による設えの特徴を示した。さらに、これらの要素を重ね合わせて検討し、中庭の居場所の領域を特徴づけるものとして「床要素」を主とした中庭の設えパターンに整理した。中庭は「歩行材」により居場所としての領域をつくるものが主であり、床に「非歩行材」を組み合わせ、居場所と観賞の性格が共存するものには「覆い要素」による半外部空間が多くなるなどの傾向を示した。

3章の中庭と居間の隣接関係と面積に関する分析では、まず中庭と居間の隣接関係を視覚的・動線の連続と断面的な配置により整理し、同階で視覚的・動線的連続をもつものが最も多くみられた。続けて、中庭の大きさにみられる特徴を、中庭の面積、中庭の面積と建築面積、中庭と居間の面積によって検討した。中庭と居間の面積比には、中庭が居間より小さいものが多いなどの傾向を示した。

4章では、前章までに得られた中庭の設えと、隣接関係と面積からみた居間との連繋の関係をマトリックスにより重ね合わせて検討することで、7つの構成類型を導いた。各類型の特徴を述べると共に、それらの年代的分布についても考察した。該当する作品数が多い類型の年代的傾向から、現代日本のコートハウスにおける内外の生活空間の特徴として、居間の付属室としての小さな中庭という構成形式が1990年代以降に顕著な傾向であること、2000年代以降は中庭のすべての領域を居場所として設える傾向が強まるが、一方で居間との関係は多様化することなどを明らかにし、さらに、都市住宅の特徴とされる「アウトドアリビング」、「積層化」との関連を示した。

このように、現代日本の住宅作品の中から、コートハウスという形式の共通性により対象を収集し、内部・外部の生活空間の構成的な特徴を立体的に把握し、体系的に考察した研究はみられず、都市住宅の計画手法を把握する資料として有益であると考ええる。また、本研究では中庭の設えと居間との連繋にみられる中庭を主とした生活空間の特徴を明らかにしたが、コートハウスにおける建物内外の生活空間の居場所としての特徴は、中庭および中庭まわりの内部生活空間における光環境の特徴など、本稿とは異なる視点からの考察も可能であり、今後の研究により明らかにしていく予定である。

表11 年代的分布

類型			年代	1960年代 1970年代 no.1~11	1980年代 no.12~46	1990年代 no.47~96	2000年代 no.97~164	合計
視 覚 的 連 続 あ り	同 階	歩行材全面	①	2	2	11	21	36
		歩行材+ 非歩行材	②	1	4	10	7	22
			③	0	4	3	4	11
			④	4	2	4	4	14
	別 階	歩行材全面	⑤	0	2	4	10	16
		歩行材+ 非歩行材	⑥	0	3	3	6	12
		非歩行材全面	⑦	0	1	3	6	10
	類型外			4	17	12	10	43
合計			11	35	50	68	164	

表11注) 表中の丸囲み数字は類型番号、数字は該当する作品数を表す。

注

注1) 参考文献1)の中で、「コートハウス court house」は「建物や塀で囲まれた中庭すなわちコートを室内に取り込んだ住宅。京都などに見られる町家やスペインのパティオ (patio、中庭) がそれに当たる。」と記されている。

注2) 参考文献1)の中で「中庭 inner court、court (yard)」は「一つの建物の中に取り込んで設けられた庭。『内庭』ともいう。」と記されている。

注3) 参考文献2)pp.80-81の「近年の都市の急激な膨張によって土地が不足し、いかにして狭い敷地に多くの人をより快適に住まわせるかが大きな問題となってきた。コート・ハウスがとり上げられ出したのはその一つの解決法としてであったであろう。」や、参考文献3)p.10の「中庭住宅は、その本質からして都市的な住まいである。」などに、コートハウスの都市住宅としての位置づけが述べられている。

注4) 参考文献4)の「最近、都市型住宅の形式に3階建て、4階建てといった中層化の傾向と同時に、コートハウス形式のものが目立ってきたように思います。それは、『内と外をどう関係づけるか』『街にどう開いていくか』といった不変の課題への、ひとつの解答なのかもしれません。」や、参考文献5)の「外部からの視線を遮る、アウトドアリビングとして庭を活用するといった手法は一般化してきたようです。都市部の狭小地に建てる方法としては、3階建てなどの積層化とともに多くの例を見ることができます。」などに、都市住宅に顕著な形式のひとつとして、コートハウスが挙げられている。

注5) 屋内外によらず、生活は住宅の敷地内を様々なに利用し得るが、本研究では、壁や床、屋根などの主要な建築的要素により形態的な境界が規定された部分を、主要な場として計画された生活空間と捉え、分析の対象としている。

注6) 参考文献6)、7)

注7) 参考文献8)で、1960年代の西沢文隆の作品を優れたコートハウスの例として挙げながら、一方でその閉鎖性と境界まわりのあり方が、それ以降、コートハウスという言葉に自縛的に存在し続けていたと指摘されている。

注8) 参考文献2)p.120「現代のコート・ハウスのポイントは敷地全体を庭と室で余すところなくデザインしつくすことに主眼が置かれており、豊かな自然と室内の親密度が重視されるからである。」

注9) 本研究では、日本における現代の建築ジャーナリズムの中で代表的なものと思われる「新建築」誌および「新建築住宅特集」誌に1960年から2009年までに掲載された、本研究で定義する中庭をもつ一戸建ての専用住宅のうち、複数世帯や分棟、アトリエ付き住居を除く、建蔽率45%以上、敷地面積300㎡以下のもので分析に十分な資料が得られた164件を対象としている。なお、1950年から1984年までは「新建築」誌を、1985年以降は「新建築住宅特集」誌を対象とした。

注10) 三面以上を建物または建物と一体化された壁によって囲まれ、上部を外気に開放された外部空間。狭小なもの（幅が2m以下）は除外し、一つの作品に複数ある場合は、居間と隣接し最も面積が大きいものを、いずれも居間と隣接しない場合は最も面積が大きいものを対象とした。また、階毎での分節を前提とし、屋外階段などで階の間に動線的な接続関係がある場合でも、各階で別個の中庭として扱う。

注11) 参考文献9)の中で、「設え」とは、「設け整えること。飾り付けること。設備。」と記されている。本研究では、中庭に屋外の生活空間としての具体的な性格を設けるものとして、床や覆いなどの構成要素に着目している。

注12) 図面中に居間や家族室などと表記され、中心的な居室と考えられる部屋。一つの作品に複数みられる場合は最も平面的に大きなものを対象とした。

注13) 本研究は拙稿・参考文献10)の分析方法等を修正、発展させたものである。

注14) 参考文献6)、7)、10)、11)、12)

注15) 参考文献13)

注16) 参考文献14)

注17) 参考文献15)

注18) 参考文献16)

注19) 参考文献17)

注20) 参考文献18)

注21) 参考文献19)

注22) 参考文献20)

注23) 参考文献21)

注24) 参考文献22)、23)

注25) 参考文献24)、25)

注26) 参考文献26)

注 27) 参考文献 27)

注 28) 参考文献 28)

注 29) 例えば、参考文献 2) p. 124「中庭と室内の親密度が高まれば床仕上げがことのほか重要度を加えてくる。(中略) 白砂や小砂利を敷きつめる日本庭園の手法も、見る庭の場合はよい。庭に降り立って使いたい場合は舗装することが望ましい。」などに、中庭の居場所としての性格と床仕上げに関する記述がみられる。

注 30) 床要素は歩行などの行為を想定し、幅 1 m 以上を占めるものを抽出した。

注 31) () 内の分母は総数、分子は該当数を示している。

注 32) 出寸法が 0.6 m 以上のものを抽出した。

注 33) 幅 2 m 以上、高さ 1.8 m 以上の開口部とした。

注 34) 1960 年代と 1970 年代は、他の年代に比べて対象となる作品数が少ないため、まとめて一つの年代として扱った。

参考文献

1) 建築大辞典 第 2 版, 彰国社, 1993. 6

2) 西沢文隆：西沢文隆小論集 1 コート・ハウス論, 相模書房, 1974. 7

3) ダンカン・マッキントッシュ：現代のコートハウス, 鹿島出版会, 1976. 9

4) 特集 コートハウス・リターンズ, 新建築住宅特集 2000 年 11 月号, p. 56, 新建築社, 2000. 11

5) 特集 コートハウスの行方, 新建築住宅特集 2003 年 5 月号, p. 63, 新建築社, 2003. 5

6) 村田涼, 永野敏幸, 安田幸一：現代日本のコートハウスにおける外部生活空間の配置と開放性, 日本建築学会計画系論文集第 661 号, pp. 569-576, 2011. 3

7) 村田涼, 鈴木英理子, 安田幸一：現代日本のコートハウスにおける前面道路からみた生活空間の開放性と閉鎖性, 日本建築学会計画系論文集第 672 号, pp. 351-358, 2012. 2

8) 村田靖夫：緑豊かな楽園へ コートハウスに期待すること, 新建築住宅特集 2003 年 5 月号, pp. 65-67, 新建築社, 2003. 5

9) 広辞苑 第 5 版, 岩波書店, 1998. 11

10) 根ヶ山愛子, 村田涼, 安田幸一ほか：現代日本のコートハウスにおける中庭の設えと内外の生活空間の連繋, 日本建築学会大会学術講演梗概集 (関東) F-2, pp. 5-6, 2011. 8

11) 村田涼, 石渡友輔, 安田幸一ほか：中庭の平面形と展開立面 現代日本のコートハウスにおける居間からみた中庭の立面・断面構成 (1), 日本建築学会大会学術講演梗概集 (関東) F-2, pp. 1-2, 2011. 8

12) 石渡友輔, 村田涼, 安田幸一ほか：中庭の立面構成と居間との関係 現代日本のコートハウスにおける居間からみた中庭の立面・断面構成 (2), 日本建築学会大会学術講演梗概集 (関東) F-2, pp. 3-4, 2011. 8

13) 松本正富, 服部孝生, 谷口宗彦：都市型コートハウスの特性分析とタイポロジー 現代日本の都市型住宅の構成形式に関する研究, 日本建築学会計画系論文集第 547 号, pp. 135-142, 2001. 9

14) 森良太, 岡河貢：中庭を有する現代住宅における形態と空間構成に関する研究, 日本建築学会中国支部研究報告集第 27 巻, pp. 581-584, 2004. 3

15) 二瓶渉, 波多野純：戦後の中庭をもつ住宅作品にみる周辺環境との対応関係, 日本建築学会関東支部研究報告集 II, pp. 573-576, 2003. 2

16) 小林尚代, 北原理雄, 神谷文子：コートハウスにおける中庭とプラン構成に関する研究 都市型住宅としてのコートハウスの研究 1, 日本建築学会大会学術講演梗概集 (関東) E, pp. 183-184, 1988. 10

17) 佐野潤一：ミース・ファン・デル・ローエの三つの中庭を持つコート・ハウスの設計過程における回転正方形出現の経緯について, 日本建築学会計画系論文集第 465 号, pp. 189-195, 1994. 11

18) 熊谷智子, 藤木隆男, 小栗克己：室の庭の関係を操作する建築的手法に関する考察-西澤文隆のコートハウス 5 作品の分析を通して-, 日本建築学会大会学術講演梗概集 (中国) F-2, pp. 525-526, 1999. 9

19) 塚本由晴, 繁昌朗, 坂本一成：現代日本の住宅作品における外部空間の分節と統合 住宅建築の構成形式に関する研究, 日本建築学会計画系論文集第 470 号, pp. 95-104, 1995. 4

20) 岡村航太, 小川次郎, 坂本一成：外部空間の配列と接続からみた都市型住宅作品の構成 現代日本の住宅作品における内外の関係による構成形式 (2), 日本建築学会計画系論文集第 552 号, pp. 141-146, 2002. 2

21) 小川次郎, 小野田環, 坂本一成：外形ヴォリュームと室の配列による建築の構成 現代日本の住宅作品における内外の関係による構成形式, 日本建築学会計画系論文集第 537 号, pp. 117-123, 2000. 11

22) 川北健雄：1990 年に発表された国内の住宅作品における外部と内部の配置構成に関する研究, 日本建築学会計画系論文集第 497 号, pp. 103-110, 1997. 7

23) 川北健雄：独立住宅の外部空間の限定形式に関する研究, 日本建築学会計画系論文集第 493 号, pp. 161-168, 1997. 3

24) 北川啓介, 鎌田裕樹：形態と性質を考慮した日本住宅の内外境域, 日本建築学会計画系論文集第 646 号, pp. 2595-2604, 2009. 12

25) 鎌田裕樹, 北川啓介, 伊藤佑治：形態と性質を考慮したアジアの伝統住宅平面の内外境域, 日本建築学会計画系論文集第 661 号, pp. 559-568, 2011. 3

26) 北川啓介, 西山尚希：壁長と室面積を考慮した近代住宅作品の平面特性, 日本建築学会計画系論文集第 614 号, pp. 129-136, 2007. 4

27) 那須聖, 八木幸二：機能空間の連続による内部空間の連続性と住宅の開放性 南カリフォルニアにおける R.M. シンドラーと R.J. ノイトラの住宅の比較を通して, 日本建築学会計画系論文集第 555 号, pp. 177-184, 2002. 5

28) 寺内美紀子, 坂本一成, 奥山信一：建築の外部空間の分節と配置形式 領域的性格からみた建築の外部空間の構成形式に関する研究, 日本建築学会計画系論文集第 491 号, pp. 91-98, 1997. 1

付表 1 対象作品リスト

no.掲載	作品名	設計者	no.掲載	作品名	設計者
1	6010 M氏邸	坂倉準三建築研究所大阪支部	83	9710 1/4Circle House	木村博昭
2	6101 正面のない住宅	坂倉準三建築研究所大阪支部	84	9711 喜連舎	中東興一
3	6208 K氏邸	永松建築設計事務所	85	9712 平野区の町屋-能見邸	安藤忠雄建築研究所
4	6210 正面のない住宅/H	坂倉準三建築研究所大阪支部	86	9801 パティオのある家	林雅子
5	6703 越智邸	田中清	87	9801 長原のコートハウス	村田靖夫建築研究室
6	6807 山城さんの家	篠原一男	88	9803 鶴沼の家	本間至
7	7101 泉の家	武者英二	89	9809 7代-ムササビの家	坂茂建築設計
8	7611 代田の町家	坂本一成	90	9810 翠町の家	井口博幸、山下弘行
9	7702 住吉の長屋	安藤忠雄	91	9811 断床の家	篠崎好明
10	7702 茅ヶ崎の家	武者英二研究室	92	9902 海南の家	八島正年、高瀬夕子
11	7702 新町の家	瀬田義久	93	9906 北畠の家	横内敏人建築設計事務所
12	8008 対空間の家	アトリエ R 斉藤義	94	9909 両国のコートハウス	村田靖夫建築研究室
13	8008 福田邸	高須賀晋	95	9909 菩提樹の家	山内清朗
14	8302 妻の住宅	渡辺明設計事務所	96	9910 沢川の家	竹原義二
15	8408 Pocket park House	渡辺明設計事務所	97	0006 桜の家	山内清朗
16	8408 U氏邸	森須賀進、大野正博	98	0009 上大岡の家	田辺芳生、池田晶弘、田あけみ
17	8408 松原の家	森島清太	99	0007 代沢の住宅	安田幸一
18	8408 森邸	原口修一級建築士事務所	100	0008 壽倉	中東興一
19	8408 Choi Box	宮脇檀建築研究室	101	0010 MID COURT	飯塚肇
20	8502 野澤邸	AMO設計事務所	102	0010 一橋学園・M邸	奥村和幸建築設計室
21	8511 信州の家	渡辺明設計事務所	103	0011 4・1	K.T.Architecture
22	8606 芝の家	西野建築研究所	104	0011 中村中町の家	尾崎公俊
23	8701 深井中町の家	竹原義二	105	0011 笠間の家	藤本考徳建築設計事務所
24	8701 西原の家	佐伏次郎	106	0109 上政の家	八島正年＋高瀬夕子
25	8702 漏戸状二対合掌の家	吉島忠男、秋山悠	107	0112 親縁住居	村田靖夫建築研究室
26	8702 緑丘の家	中村弘道	108	0112 清水の家	谷内田幸夫
27	8703 経堂 回光の家	羽深隆雄	109	0208 M邸	河堀健
28	8708 今村邸	平倉直子建築設計事務所	110	0209 春日野道の家	岡井敏明
29	8708 東玉川の住宅	長谷川逸子	111	0210 志木の家	上条美枝建築設計室
30	8709 大野がけ"パ"カ	篠原好明	112	0301 BLOC	米田明、池田晶弘
31	8709 戸塚の家	高須賀晋	113	0304 鷹宮の家	杉千香＋高橋真奈美
32	8710 KUMHOUSE	岸和郎	114	0304 南塚の家	村松聖安
33	8801 関大前の家	塚口明洋建築研究室	115	0304 自由が丘の3+0.2	坂井三一郎
34	8805 自邸	坂本昭	116	0305 自由が丘の3+0.2	村田靖夫建築研究室
35	8807 山本邸	高柳おさむ建築研究所	117	0305 G&G HOUSE	塚田真樹子建築設計
36	8807 DO FUKAZAWA	鈴木トウ"ド" 建築設計事務所	118	0305 W邸	山本公也、瀬川康秀
37	8809 塗屋連の家	竹原義二	119	0306 清水邸	椎名英三建築設計事務所
38	8810 I邸	北山孝二郎	120	0307 西香の家	前井一規建築設計工房
39	8810 山田台の住宅	長谷川逸子	121	0308 DEVICE#9	田辺紀貞アトリエ
40	8811 O邸	安藤忠雄建築研究所	122	0311 HOUSE GT	堀場弘、工藤和美
41	8811 墨田の家	藤江道晶	123	0404 上原の家	みかんぐみ
42	8902 ブロックHOUSE 2	渡辺明設計事務所	124	0405 標準住宅2004	岸和郎
43	8903 RMO8758	南條設計室	125	0406 Roastfish HOUSE	隈研明夫アール・アイ・エー
44	8905 洛北の家	岸和郎建築設計事務所	126	0407 O House	入江雄一＋上田雅人
45	8905 芦花山手通りの家	建築資料室	127	0407 高松町ガレージ	メジロスタジオ
46	8907 石丸の家	竹原義二	128	0408 したりのお家	泉幸南建築研究所
47	9005 HOUSE XX	市原出建築設計事務所	129	0409 美濃園の長屋	小野純彦建築設計事務所
48	9009 JAH	竹原義二、岡田裕康	130	0409 BARRILL	タチバナ 427-474
49	9011 ABITA-2	CITY建築工房	131	0501 仁保の家	古本篤
50	9101 大山町の住宅	渡辺明設計事務所	132	0504 目白の家	森清敏、河村奈津子
51	9103 幸町の家	小林良行	133	0505 花見川の家	田辺芳生
52	9104 百合ヶ丘の家	高須賀晋	134	0506 二重の家	MTA
53	9211 上達堂の家	アーキテクトファイブ	135	0506 逗子W邸	清水勝広、名和研二
54	9211 山坂の家	竹原義二	136	0508 HOUSE MTK	工藤和美、堀場弘
55	9211 辰川の家	岩本秀三設計事務所	137	0509 ナガマチハウス	寺嶋浩一
56	9212 フットコート家(A邸)	渡辺武信設計室	138	0601 box q	吉川高一
57	9212 海老園の家	井口博幸	139	0603 幸手N邸	中辻正明、中辻雅江
58	9302 玉串川の家	竹原義二	140	0604 常盤町の家	田頭健司建築研究所
59	9303 桃ヶ池の家	吉井歳晴	141	0606 スレートハウス	中園哲也
60	9303 観音寺の家(西森邸)	岸上克康建築設計事務所	142	0606 黒壁の家	小山隆治建築研究所
61	9308 高根台の家	北山孝二郎	143	0611 角窓の家	坂牛幸、木島千嘉
62	9402 C.O.V.の家	篠崎好明	144	0612 box q	椎名英三建築設計事務所
63	9408 用賀の家	千葉孝、ナンシーフィンレイ	145	0612 fu-house	押尾卓治
64	9408 都島の家	吉井歳晴	146	0702 F邸	橋本夕起夫デザインスタジオ
65	9410 亀戸の家	廣田豊	147	0703 北沢の家	中村潔
66	9410 指板大蔵の小さな家	北山孝二郎	148	0703 s-HOUSE	廣永祥子、福島科津也
67	9411 小路の家	竹原義二	149	0704 たて庭の家	横内敏人建築設計事務所
68	9412 付替の家	羽深隆雄	150	0706 M/異文化された場	有馬孝之
69	9412 府中の町家	染谷正弘	151	0712 FUハウス	石田敏明
70	9501 日吉台の家	吉羽裕子、永田実雪	152	0802 Rainbow House	今永利和
71	9502 I 邸	井上昌彦	153	0807 G-house	安藤敏
72	9504 栗ヶ丘の家	本間至	154	0810 桜新町・緑地の平屋	村田靖夫建築研究室
73	9507 T+HOUSE	坂井宝一郎	155	0811 雨晴れの住処	原田真宏、原田麻虎
74	9507 松原の家	石井修	156	0812 世田谷S	都留理子建築設計スタジオ
75	9604 石津邸	阿部勤、竹達宏	157	0902 桃燕居	川口通正建築研究所
76	9608 春日川の住宅	瀬江宏	158	0904 小倉町の家	竹原義二
77	9610 横浜のアトリエ	安井秀夫アトリエ	159	0907 江波東の家	宮森洋一郎建築設計室
78	9702 街なかの家	圓山彬雄	160	0907 藤久保の家	吉田豊建築設計事務所
79	9704 D-FISH	前田紀貞アトリエ	161	0908 台の家	みかんぐみ
80	9706 GREEN-WALL	米田明	162	0909 cross air	古閑建築設計事務所
81	9707 東大阪の家	岸和郎	163	0912 湘南のコートハウス	高野保光
82	9707 木月	泉幸南建築研究所	164	0912 赤堤の住宅	長谷川逸子

(2011年11月10日原稿受理, 2012年 2 月27日採用決定)